

( 続紙 1 )

京都大学	博士 ( 人間・環境学 )	氏名	金仙花
論文題目	「破局」と「再生」としての反近代—京都学派・日本浪漫派・アジア主義—		
(論文内容の要旨)			
<p>本博士学位請求論文は、1930～40年代の日本の言説空間において、「近代の超克」論を含むあらゆる反近代言説が登場した思想史的背景とその様相を、京都学派、日本浪漫派、アジア主義の言説を中心に考察し、その反近代的思想の想像力を、「破局／再生の叙事」として再解釈したものである。既存のイデオロギー的分析とは異なり、当時の思考を一つの物語、つまり「破局／再生の叙事」として再解釈することを本論文では試みている。第一章では先行研究のイデオロギー性の分析とその問題点が指摘された。</p> <p>第二章では以下のことが論じられている。しばしば日本のファシズムは、前近代の残滓、未完の近代として捉えられがちである。しかし対立的に語られるニューディール型の社会とファシズム型の社会は、実はさして決定的に異なるものではなく、いずれも世界大戦の戦間期におけるグローバルな社会変動のなかで、「人的および経済的資源を高い効率で動員する」という20世紀的システム社会への転換をいかに完遂するかという目的を持つものであった。</p> <p>そもそも近代的時間は、「不可逆的に進行する進歩の過程」として表象されるため、過去は徹底的に「過ぎ去ったもの」として理解される。第三章、第四章では、京都学派と日本浪漫派（とりわけ西谷啓治と保田與重郎）において過去（＝伝統）とは、単に「過ぎ去ったもの」「消えてしまったもの」「克服すべきもの」ではなく、むしろ「ずっと有り続けるもの」「永遠の現在」という時間観のなかで位置づけられていることが論じられた。この時間観の頂点に天皇があり、天皇として象徴される「万世一系」という観念は、近代の不可逆的時間観と背馳する時間的装置である。天皇を通じて喚起される日本的なもの（伝統）への復元は、近代性の認識論的・価値論的転倒によって新しく復元された超克（再生）の一装置であるといえる。</p> <p>進歩的時間観に対する超克として求められたもう一つの「再生」叙事は、「非常時」の時間である。第五章ではこのことが分析されている。京都学派の「世界史の哲学」において議論された「非常時」の時間観は、総力戦について「戦争を永久化すること」としてとらえ、「非常時」を「戦時と平時の区別がなくなった状態」として受け入れた。「戦時」と「平時」の区別がなくなるということは、「戦時」と「平時」の区別がもはや無意味であることを意味し、さらに「戦争と平和」、「戦時と戦後」の境界がなくな</p>			

ることを意味する。本章では総力戦に対するこのような「世界史の哲学」論者の認識が、シュミットの「例外状態論」と比較され、分析されている。

第六章では三木清の東亜協同体論が主に取り上げられている。それは三木自身が述べているように、「時間的には資本主義問題の解決と空間的には東亜の統一」を原理としている。三木の論はまさに、ヨーロッパ的世界に対抗できる地理的空間としての東亜を創出するものであったといえる。西洋とアジアの地理的（空間的）差異を文化的な差異に置き換えることによって、東亜の統一の前提となるべき東洋文化の共通性を事後的に構築するメカニズムとして、三木の東亜共同体論が解釈された。

超克の「空間的」装置としてのアジアを考える際、見逃してはならないことは、近代的秩序を乗り越える原理として想定されているアジア的秩序の原理が、アジア的（朱子学的）世界観にもとづいている点である。高山岩男を含む「世界史の哲学」や協同主義の三木清は、世界史的使命としての東洋の統一を朱子学的な「道義」によって達成しようとしていた。

普遍的価値、普遍的規範性を意味する「道義」言説は、帝国日本と中国との戦争を道義的原理として説明しようとするとき、困難に直面する。道義は西洋帝国主義に対しては対抗言説になり得ても、中国に対しては侵略行為を正当化させるイデオロギーとして機能してしまうという両面性をもつからである。だが、そのイデオロギー機能を可能にする道徳的序列化の構造自体は、すでに朱子学的世界観に内在しているものである。そこに矛盾がある。言い換えれば「道義」言説は、その道義の具現化による序列化を通じて、中国や朝鮮を支配することを正当化するイデオロギーの側面をいつもすでに持っているわけなのである。

第七章ではこのようにアジア侵略のイデオロギーとして機能したアジア主義が新たな観点から再検討され、アジア主義の限界と可能性が多角的に考察されている。1930～40年代における超克論者あるいは反近代論者は、近代西洋による資本主義や帝国主義という危機に対抗して、またアジア各国の民族主義的抵抗に直面して、「アジア」に新たな意味付与をしたのである。近代に対する終焉の感覚と幻滅の意識を生んだ「破局」の叙事は、崩壊や混沌としての近代の彼方を求めた。そして「アジア」という新しい世界を「再生」の叙事として創造したのだ。その転換を図ったのがまさに、1930～40年代日本の言説空間だったのである。

(論文審査の結果の要旨)

本博士学位請求論文は、1930～40年代日本における「反近代」言説の中心であった「近代の超克」論、京都学派、日本浪漫派、アジア主義の思考を分析し、その思想的想像力を「破局／再生の叙事」として再解釈するという斬新なものである。

1930～40年代を扱った既存の思想史研究は、ほとんど日本帝国主義という理念に対する批判のみを中心に据えてきた。本論文では1930～40年代の思想史を考察するに際して、そのようなイデオロギー的分析から脱することを企図した。この姿勢は特に高く評価できる。近年、「右翼」研究において脱イデオロギー的性格の業績が現われているが、そのような視座はいまだ一般的ではないからである。結論からいえば、たとえば「京都学派の〈道義〉言説が西洋に対してはアンチテーゼになるがアジアに対しては侵略の道具になる」という論述のように、イデオロギー批判の枠内に収まっている部分も若干あるものの、全体的にいつてきわめて斬新な視点の提供に成功していると評価できる。

本論文の基本的視座は、戦前の日本および日本思想を「特殊」の範疇に閉じ込めるのではなく、西洋近代との同時性という枠から思考することである。1930年代の日本における反近代論は、シュペングラー流の「西洋の没落」論および大恐慌をはじめとする近代の危機という「破局」の想像力から生まれた。だが、「破局」の叙事はまた新しい「始まり」へと繋がる。この始まりの物語を本論文では「再生」叙事として新たにとらえなおしている。「破局」から「再生」への変換は、時空間の政治学を通じて作動するとされる点も、これまでの「近代の超克」研究においては考察されなかったものである。

このような観点から、本論文は、「近代の超克」座談会、京都学派、日本浪漫派、三木清、アジア主義について広範囲に論じていく。

第一章では既存の研究がイデオロギー的な視座の枠内にとどまっていることを詳細に分析し、本論文がそれらとは異質な視角を持つことを明快に論じている。

第二章では、「総力戦体制論」を用いて、ニューディール型の社会とファシズム型の社会の類似性を論じた。この総力戦体制論によって「近代の超克」思想全体をシステム社会論的に解釈すればもっと画期的であったであろうが、この点は今後の研究の深化に俟ちたい。

第三章から第五章では、「近代の超克」座談会や京都学派の時間論を分析している。そもそも近代の進歩的時間観において、過去は徹底的に過ぎ去ったものとして理解される。それではそれと根源的に背馳する時間はどこにあるのか。本論文ではそれを、西谷啓治の『神皇正統記』解釈や保田與重郎の日本回帰論に見いだす。それらは過去(伝統)を単に「過ぎ去ったもの」ではなく、「ずっと有り続けるもの」「永遠の現在」の時間のなかに位置づける。すると天皇として表象される「万世一系」の時間叙事はその頂点にあることになる。これこそが、不可逆的に進行する近

代の進歩的時間観と背馳する時間的装置である、と本論文は語る。西谷と保田を同一地平で解釈することの「おもしろさ」は評価できる反面、この両者が根本的に異なっている側面を考究する必要もある。

反近代的な時間論はさらに、戦争とも深く関わる。高山岩男や高坂正顕など京都学派の「世界史の哲学」は、総力戦を「戦時と平時の区別がなくなった」「永久戦争」として受け入れ、「例外状態」「非常時」の時間を提示する。このこととシュミットの「例外状態」論との比較も新しい視点であるといえる。

以上の時間論は、これまでの「近代の超克」研究が見逃してきたものであり、「破局」と「再生」という概念によって1930～40年代の時間論を見事に描ききったこと、戦前日本の思想史をひとつのまとまったイメージで提示したことが高く評価できる。

第六章では、反近代の空間としての「アジア」が論じられる。高山岩男は既存の歴史性＝時間性の観念が西洋＝近代＝普遍の表象体系に基づいていることを批判しつつ、「空間性」を持ち出して「アジア」の歴史的主体性を強調する。「東亜の統一」を原理とする三木清の「東亜協同体」論やアジア主義は、このような反近代論の「空間的」再生叙事であるという興味深い論点が提示される。

第七章では、孫歌などの議論を踏まえて、戦前の日本思想が「再生」の叙事を語りながら結局は反近代への回路をつくることに失敗した理由を分析している。この部分が戦前と未来をつなぐ役割をしている。つまり、「アジア」を実体化せず、むしろ多様な主体の「あいだ」にのみ存在するのがアジアなのだ、という結論である。1930～40年代の思想を語ることから始まった本論文の視野は、ここで「われわれが構築すべき未来のアジア」という論点をも包摂するものとなりえている。

このように本論文は、1930～40年代の思想を「破局」と「再生」という明確な枠組みによって秩序づけることに成功した。分析の手法は思想史を主としながら、哲学の切り口も導入している。既存の1930～40年代思想研究においてこのように野心的かつ斬新な視座のものは存在せず、その意味で本論文は、今後の日本思想史研究に大きく寄与するであろうと評価される。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成27年1月23日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：                      年           月           日以降